

容赦のない「警棒」

—6・28 新宿土曜反戦フォーク—

西口地下広場は人・人・人

「反戦フォーク」の歌声は、東京を中心に大阪・京都など全国に波及しつつある。ここ新宿でも毎土曜日はベ平連を中心とするフォーク集會が行われ、機動隊と対峙する。以下はそのある土曜日の新宿のルポである。

(6・28 八重樫記者)

二十八日夜、この日もまた新宿「ギターを抱えた」ヤングベ平連、西口地下広場は、学生をはじめとする数千人の「反戦フォークソング集會」に参加する人々で身動きできないほどとなった。

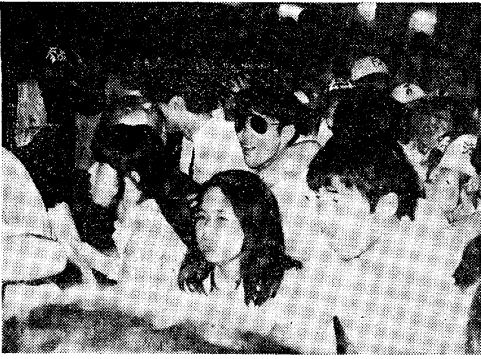
黄昏かけた国電新宿駅西口改札口を出ると、黒、赤、白……のヘルメット、旗がいまなり目飛び込み、同時に携帯用のスピーカーから、アジ演説やカンパを求める声が流れてきた。

西口地下広場では至るところで、発売以来思わぬブームを呼んでいる獄中、簡集が床の上に横まわられて流れている。さらに、ありとあらゆる反日共系の機関紙、反戦ポスターなども並んでいた。

この大海の渦の中、十数人の

最後にフォーク集會は終わった。参加者はその後「安楽粉砕」「闘争勝利」のかけ声と共に、道路いっばいに広がり、時にはシクサクデモも行ないながら、地下道を行進し、地上へと出て行った。西口広場に残った学生らは、小さなグループをいくつも作って討論を行なう。青年と青年、若者と中年、高校生とその父親の年頃と思われろオジサンとの激論のシーンが方方で見受けられる。「高校生はそんなことをしちゃいかん、まず勉強があるだろう」勉強はちゃんとしますよ、その上でやっているんです。なぜ高校生だつたら自分の主張をしないといけないんですか」と双方とも口角アツを飛ばす。大人は自分達の常識を疑おうともしないし、若者は非論理的なものは認めない。うなづく者、反論する者、たとえ話ばかりかみ合わないこともそこには鋭利な対話があった。

七時五十分、インターの合唱を



八時半、地下広場に備後ガスが包ってきた。地上に駆け上ると、鈍いガス銃の音が聞える。副都心四号線の大連の交差点付近で、シムンとらむ機動隊と「勝利の日まで」を歌う若者が対峙していた。しばし投石が飛いたが、間もなく機動隊は背後をまわり、学生に向かって攻撃を開始した。学生らは一斉に逃げた。現場はバスを待つ者やヤジ馬などが大勢集まっていた。その中に、デモの学生が逃げ込んだ。機動隊はなほも群衆の中心まで追いつけ、容赦なく警棒をふる。

群衆が大きく揺れ動く、そして逃げ惑う。たちまち広場一帯は混乱の渦に化けた。それでも「勝利の日まで」の歌声はもまない。そして「機動隊帰れ、帰れ」のシュプレヒコール。機動隊は地下広場や地上にいる群衆に向かってきこる構わずガス弾を撃ち込む。それは頭の上を音を出して飛び、逃げ惑う人々の足元で爆発する。すさまじい光景である。

駅出入口付近まで機動隊が突進してきた。記者は持っていたカメラを向けた瞬間、走り過ぎる機動隊の一人が蹴り上げたと思つたと同時に、顔面に刺撃を受けた。気がついてみると前歯が一本、半分ほどかかっていた。

十時過ぎ、騒ぎもようやく静まりかけた頃、見ると地上、地下の西口交番のガラスはメチャメチャに壊されていた。地下へ降りると催涙ガスの目にしみる中で教人の若者が「フォーク集會」で汚れた地下広場を、大きなビニール袋を引きずりながら掃除をしていた。

(カットは28日のフォーク集會風景)